

大藪虎亮著

正松傑作選新解

昭和二十六年十月二十日 印刷
昭和二十六年十月廿五日 發行

近松傑作選新解

定價 金貳百圓

著者 廣島市翠町一四八八番地
大 藪 虎 亮

發行者 株式會社 明治書院
東京都千代田區神田錦町一丁目十六番地
專務取締役 文 入 宗 義

印刷所 東京都中央區東銀座三丁目七番地
電 新 井 修 堂

發行所

東京都千代田區神田錦町一丁目
(振替東京四九六一番)

株式會社 明治書院

電話神田(25)(〇三五四番)
(五七三〇番)

は し が き

一、本書は、近松門左衛門作、世話浄瑠璃中の傑作、女殺油地獄おんなごろしあぶらのじやく、心中天網島しんじゆうてんのあみじま、冥途の飛脚めいさのひやくの三曲を選んで、語釋・鑑賞・解説等を加えたものである。

一、語釋は簡潔を旨としたので、煩雜な考證はなるべく避けた。文脈・修辭等には特に意を用いた。

一、三曲とも七行本によつたが、全集ものも參考にした。女殺油地獄には角書つのがきはないが、心中天網島には、紙屋治兵衛・きいの国や小はるを並べて角書してあり、冥途の飛脚には、忠兵衛・梅川を並べて角書してある。

一、原文には文意上の句讀點はなく、すべて語り句調の上から句點が打つてあるので、これに従つた。

一、原文のかなは歴史的かなづかいに改めたが、もとのまゝにした所もすくなくない。かなを漢字に改めた所もまゝある。

一、墨譜ふしはかせすなわち節付ふしつけは、こまかいものは省き、地・詞・フシを採つたが、その他の節付を採つた所もある。

一、義太夫ぶし以外の、文彌・江戸・道具屋・冷泉の諸流を始めとして、謠・舞・歌・音頭・和讃などある所は、そのまゝ採つた。讀む上に多少の参考になるであろう。

一、わが国の音樂的文章を二大別すれば、一つは謠いもの、一つは語りものである。淨るりの諸派中、義太夫ぶしの淨るり文は特に語り物の代表的なもので、本書の三曲は竹本義太夫によつて語られたものである。

一、語釋索引を卷尾にそえた。できるだけくわしく作製した。再出の語は釋を省いたが多いので、索引を利用されたい。參考圖版も索引を參照されたい。

昭和二十六年九月

著者

目次

女殺油地獄

解説……………二

鑑賞……………五

上巻……………二

中巻……………三

下巻……………六

心中天の網島

解説……………六

鑑賞……………九

上巻……………二

中巻……………七

下巻……………一四

冥途の飛脚

解説

..... 一三

鑑賞

..... 一五

上卷

..... 一六

中卷

..... 一七

下卷

..... 一八

附 載

一、浄瑠璃文の構成

..... 二七

二、近松の演劇論

..... 二八

三、近松の辭世の文

..... 三一

四、近松浄瑠璃年表

..... 二三

語釋索引

..... 二五

圖版索引

..... 二六

女
殺
油
地
獄

解説

著作 外題年鑑によれば、享保六年（西紀一七二二年）七月十五日、大阪道頓堀竹本座初演、作者六十九歳。外題は本曲の下巻に、「お吉が身を裂く劍の山目前油の地獄の苦しみ」とあるのによつたのであらう

梗概 上巻

時は卯月半ば頃、野崎觀音の開帳とて、大阪辺からの參詣者は鯉川を舟でさかのぼる者が多い。鯉川の上流

廢屋川の北に得庵村（今の徳庵村）があり、この得庵堤の掛茶屋が上巻の舞臺である。大阪本天満町油商豊島屋七左衛門女房お吉は、野崎參りの途中、夫を待ち合せてこの掛茶屋に休んだ。三人の娘を連れている。姉は九つ、妹は六つ、末は二つ、お吉の年は二十七、子持とは見えぬ花盛り。こゝへ、同町筋向の、同じく油商河内屋徳兵衛の二番息子與兵衛（二十三歳）は、まだ親がかり、遊び仲間の刷毛の彌五郎、皆朱の善兵衛と三人づれで通りがゐる。與兵衛は、お吉に呼びとめられて茶店に腰かける。お吉は參詣人の噂をする間にも、茶屋遊びをやめてまじめに働けと與兵衛に忠告して立ち去る。こゝに奥州會津の客に揚げられて、天王寺屋の小菊が女將と下女に伴なわれて登場する。どこかで御座舟から上つて堤の道を來たのである。與兵衛は、草履を腰に腕まくり、立ちほだかつて、自分に對しては野崎參りの同行を斷りながら、會津の客とつれだつてゐる小菊を責める。會津の客もだまつてはいず、奥州者の泥足食らえと、忽ちけんかつかみあいとなり、茶屋は店をしまうやら、相手はいつか散り失せて、泥まみれの與兵衛があとに残つた。これより先、高槻侯の出頭小栗八彌は、侯の代參として若黨を隨え乗馬で通りがゐつたが、與兵衛が投げる泥砂があいにく八彌の衣裝や馬具まで汚した。徒士頭の山本森右衛門は與兵衛を取つて押さえたが、顔を見れば甥の與兵衛である。甥とわかればなお助けられぬ、討つて捨てると引立てるのを、馬上の八彌はとめて先を急いだ。お吉はあまりの人ごみで立ち歸り、夫を待ち合わせるため再び茶店にもどつたが、與兵衛は地獄で佛と喜び、けんかの始終を話し、お吉に着物の泥をすゝいでもらう。そこへ夫七左衛門が來て、小言を云いながら妻子をつれて野崎へ向う。あとに與兵衛はぼうぜんとしている所へ、八彌の一行の下向である。森右衛門は與兵衛を捕え、再び討つて捨てようとするのを、八彌は、おじ、おいの間柄と知つて知らずか、寛大な料簡で助けてやる。

中巻

場面は河内屋徳兵衛の店先。山上講の人々が山からの歸りに立ち寄り、「與兵衛は迎えにも出ないが、どうした」

という。父親は人々をいたわりながら、妹おかち（今の徳兵衛夫婦の娘）が病気で醫者を代えても直らぬといへば、講中の一人、「それは近頃はやりの白稻荷法印という山伏の祈禱が一番よからう」などいつて、人々は立ち去った。入り替つて順慶町の兄（與兵衛の）太兵衛が来た。太兵衛が「道で母にも出あつて話したが、高槻の叔父森右衛門様から飛脚の手紙が来て、前月野崎参りの時、與兵衛の亂暴で、武士の面目が立たず、近日大阪へ下るとの知らせ、地體親父様が手ぬるい、私と與兵衛とはお前の種でないとて、あまり遠慮が過ぎる 叩き出して、ひどい主人につけて嬌め直そう」といへば、徳兵衛は無念そうに述懐を始めて、「故旦那様往生の時は、そなたが七つ、與兵衛めは四つ、叔父森右衛門の頼みで、そちがこの家を見捨てては皆路頭に立つ、親方の内儀と夫婦になつて子供の教育を頼むとの事で、商賣をついだが、與兵衛の放蕩には困りぬいた」と歎く。さて太兵衛と入り替つて例の山伏が祈禱に来、ついで與兵衛が歸つて来た。與兵衛は、「あとの月、叔父森右衛門に野崎参りに逢つたが、その話では、主人の銀を遣い、この節季に辨償せねば切腹だ、銀三貫めこの與兵衛に持たせてくれとの頼みだ」という。父親は、たつた今の太兵衛の話とはうらおもて、にくくおかしく、このうそを一蹴して相手にならず、おかちの祈りに氣を配る。法印は數珠おしもんで祈る最中、與兵衛はむつくと起き、山伏を落間に突き落したので、山伏は命からうへにげ去った。與兵衛は膝まくりして父親に對し「妹にぜひ御取つて所帯渡す氣か」といへば、「お、渡す」、「むううういうた」と、父親を足げにかけて踏みつける。妹おかちはたまりかね、兄（與兵衛）に頼まれて作病していた事をついにばらす。與兵衛は烈火の如く怒り、おかちをもけとばし、これを制止する父親を散々に踏む最中、母親お沢が立ち歸り、はつとばかり藥瓶投げすて、與兵衛のたぶさをつかんで投げ倒し、切々として異見を述べ、涙を拭うひまもない ついに 枌おうちの先で敷居の外へこすり出したが、徳兵衛はわつと叫び、與兵衛の出て行く後姿を見送り、「死なれた旦那に生きうつし、旦那を追ひ出す氣がしてならぬ」と、のびあがる。

下巻 豊島屋七左衛門宅。時は五月の四日の夜 女房お吉は、あすはお節供なので、娘三人の髪を結っている。主人七左は掛取の途中たち歸つたが、まだ掛を取る所があるとして、酒一杯立ちながら飲んで出て行く。昔は五節供の前日毎に受節するのが商家の習いであつた。河内屋與兵衛は、一生指さぬ脇差も今宵こじりの詰まりの分別、豊島屋の門の口に現われたと、うしろから呼びとめたのは金貨の綿屋小兵衛。銀二百匁の請求である。證文は、返すのが明日に延びれば銀一貫匁の約定である。しかも親徳兵衛の謀判である。「今宵延びれば町役人に訴える」とおどされて、「與兵衛も男じや、當てがある」といつ

て、やつと小兵衛を歸らせた。と見れば、小提燈が来る。親父らしいと、平蜘蛛のように戸の外に身を忍ぶ。徳兵衛は氣もつかず、お吉に會つて、與兵衛の事につき色々心配をかけると思ひながら、與兵衛が再び家にもどるやうに頼むといい、錢三百文を差出し、「これは女房に内所で持つてきた、七左殿の心付として與兵衛にやつて下さい」と頼む。と、うしろの門口、「御免下さい」とはいつてくるのは女房お沢。徳兵衛もちよつときまりが悪い。お沢は徳兵衛に向い、「又與兵衛の事悔みにか、實の母が追い出すからは氣遣う事はない。この錢三百あなのためにやるのか、さあ歸ろう」と袖を取る。徳兵衛は振り放し、お沢と口論を始め、歸るなら一緒に引立てるお澤の懷から、粽ちまき一把と金五百文が板間にがりりと落ちた。お沢は穴へでも入りたい氣持、「詞ことばではけんくいうたけれど、實はお前さんに與兵衛をかわいがつてもらいたさ、日頃一文でも盗まぬ身が、子故のやみに迷うて盗みが現われた、許して下され徳兵衛殿」と、ひたすらにわびながら、夫婦は歸つた。これを見届けて與兵衛はいいつて來た。お吉は錢八百と粽を差出し、「天道から降りました」と、例によつて與兵衛を忠告し勵ます。與兵衛は、「先から蚊に食われ、兩親の愁歎聞いて、よう合點した。眞人間になつて孝行をしたいが、肝心の錢が足らぬ。新銀でたつた二百め貸して下され」といつて、親父の謀判して借銀した事を打明けて、切に頼む。お吉は一旦同情はしたが、例の僞りと思つて、きつぱりことわる。與兵衛も一分別、「それでは借りますまい、この空樽に油二升取り替えて下され」という。「それは同じ商賣の間柄」と、賣場にかゝるお吉のうしろに白刃の光。お吉は目前油の地獄の苦しみ、ついに菖蒲刀の露と消えた。與兵衛は上銀五百八十文を盗み、ふるえる足も上の空、一さんに逃げ出した。さて叔父森右衛門は、お吉殺しは與兵衛にちがいないと、新町、曾根崎とさがし廻つたが、ついに出会わなかつた。豊島屋では、やがて三十五日の逮夜たいやが來た。姉嬢は佛壇についてばかり、中嬢は朝から晩まであきんどとわめき、末の子は乳がないので、お吉の死んだ翌日、養育料をつけて、よそにやつたのであつた。一座の人々は七左衛門を慰めているうち、鼠のあばれで天井の梁はりから反故はぐがおちた。見れば血がついて、與兵衛の筆蹟である。さては五月三日野崎参りの割付だと人々は一決した。そこへ與兵衛がおうへいな態度で、「殺し手もおつけ知れましょ」と、はいつてきた。七左衛門は見るより棒押取おつつて立ち上がる。與兵衛は、「世間は廣いし、似た筆蹟があるまいものでもない」と、棒をのがれて逃げようとする所へ、役人が兩三人、どつこい捕つたとねじすえた。森右衛門は甥に向い、「露見せぬ内遠國へ逃がすか、自害を勸めて恥を隠してやろうと、新町曾根崎を探したが出会わぬは汝の不運だ」と歎きながら、兄太兵衛が持参した古拾を取出させた。これはお吉を殺した時に着ていた物で、血痕がついている。これを酒で洗え

ば眞赤な色に變つた。與兵衛は大聲をあげ、「一生一文だつて盗みをした事はないが、銀一貫匁の證文を借り、一夜過ぎれば親の難儀、人を殺せば人の難儀に氣がつかなくなつた。仇も敵も一つ悲願、なむあみだ」と云わせもはてずしぱりあげ、ついに刑場千日へと送られて行つた。

參考 下卷に「油屋の女房殺し、酒屋にしかへて幸左衛門がするげな、殺し手は文藏、にくいげな」とあるので、すでに歌舞伎で上演されている事が知られる。近松は恐らくこの歌舞伎に刺激されて油地獄を作つたのであらう。歌舞伎では油屋を酒屋にししかへたのを、近松は油屋のまゝにしたのである。これによつて、油屋の女房殺しの事實のあつた事が推量される。大歌舞伎外題平鑑中之巻、享保六年の條に、「七月七日ヨリ 契情八棟造」とあつて、大阪中座の興行で、座本は竹島幸左衛門で、また文藏の名も見える。この外題は、刊本が不明なので、構想などはよくわからない。或はこの外題の切として酒屋の女房殺しを演じたのかも知れない。近松の油地獄は、その後再演されたか不明である。この曲は、全體を通じて與兵衛の不良性が描寫され、殊にお吉殺しの場面などは悲惨であつて、男女のつやつぱい場面などは少しもないので、當時の人氣には投じなかつたと思われる。しかしながら、明治以後はこの作の眞價が認められて、交樂でも上演され、歌舞伎にも上演され、映畫にもなつた。

鑑賞

人物 この曲の主要人物は與兵衛である。次にはお吉、その次には養父徳兵衛、實母お澤である。與兵衛のみの言動を主として考えれば、たゞ不良性の描寫のみにとゞまつて、作としての眞價は高くないと思う。これに配するにお吉の性格と、徳兵衛の主従觀念と、お澤の母性愛とをもつてして、始めて文藝的眞價が高くなつて、與兵衛の言動も光つてくるのである。また反對に、與兵衛の不良によつて、これを取巻く愛が光つてゐるのである。

さて、與兵衛がお吉を殺した動機については、從來故殺か否か異論があり、この點はこの作を鑑賞する上に頗る重要な問題である。それゆゑ、まず與兵衛の言動を觀察してみる。與兵衛は二十三歳の青年で、まだ親がかりであるが、四歳の時に實父徳兵衛が死んだので、叔父森右衛門は遺族の生活を心配して、忠實な手代（後の徳兵衛）に相談して、「後家お沢と夫婦とな

つて家業をついでくれ、そうすれば子供二人も路頭に迷わずにすむ」と切に頼むので、せんかたなく承諾したのが養父徳兵衛である。徳兵衛からいえば與兵衛は先主人の坊ちゃん、従つて遠慮がちであり、與兵衛としては養父は以前の世代であり、幼年時代から呼び捨てにした雇人である。父として尊敬する念の起るはずがない。養父と與兵衛との間に立つて苦勞するのは實母お沢である。お沢は徳兵衛の前では與兵衛をがみ／＼と叱るが、實は徳兵衛に與兵衛をかわいがつてもらいたさで、かげでは與兵衛に對して甘いのである。與兵衛たるもの、ます／＼増長せざるを得ない。自然に不良仲間もでき、遊里に足を入れる事になる。かくては金錢に不埒となるのも古今の常道である。元來、近世商家の家督相續の風習としては、手代が後家と夫婦となつて遺族の生計を立て、父祖傳來の家業の繼續を計る例は少なくなかつた。そして名前も先代が徳兵衛ならば、これをつぐ者も同じく徳兵衛と名のるのが慣習であつた。このような環境の内に育つた與兵衛が、不良となるのも無理ではなく、又進退きわまつて殺人をも犯す事もありそんな事である。與兵衛の人殺しは、近世家族制度の風習が生んだ悲劇の一つと見ても差支ないと思う。

與兵衛は、お吉の家を訪ねようと思つた時、金を貸さねば殺すという殺意をあらかじめもつていたであらうか。まず與兵衛の日頃の言行に注意してみる。上巻、得庵堤では、遊女小菊が野崎參りを裏切つたというので、與兵衛と他の惡友二人とで、「草履を腰に腕まくり」して小菊を待ち受けたが、草履を脱いで腰に挟む動作は、全く不良の徒の態度である。そして、ついには會津の客とつかみ合いを始めている。中巻では、養父徳兵衛を踏み倒して足げにかけ、實妹おかちに作病させ（作病させたわけは親がおかちに絆を取つてつがせるというからである）、おかちがこれを暴露するや、病み疲れた妹をも足げにしている。母が頼んだ山伏を引きずり出し、突き落している。得庵堤でけんかして、命を助けてもらつた叔父森右衛門の恩義を無視して、「このおじが、主人の金を使い込んで、自殺せねばならぬ、與兵衛に銀三貫目持つてきてくれ」と頼まれたと偽つて、親から金を詐取しようとした。恩を仇で返そうとしたわけである。かれは父思慮は淺薄であつた。この事はこゝに一々述べないが、とにかく、親、兄、おじ、妹などに對して敬愛の念がなく、思慮淺薄で、放埒無慙な遊蕩兒に過ぎなかつたのである。その與兵衛が豊島屋を訪う時、「一生指さぬ脇差も今宵こじりの詰まりの分別」とある。すでに彼の胸中には一分別あつた事が知られる。私は、お吉に金を無心し、もし聞かれない場合は、おどして無理にも借ろうという考であつたと推量する。次に、兩親が歸り去つて後、父母の歸るのを見て「心一つに打うなづき、脇差抜いて懷にさいたるくゞりさらりとあげ、つゝと

入るより胸もくろくも落しつけ」とある。これは短刀でおどす時、お吉に戸外へ逃げられては駄目になるばかりか、近所がさわぐのみならず、主人七左が突然はいつてきても困ると思うからである。彼はいく／＼借金をねだり始めたが、お吉は「なる程、金は奥の戸棚に上銀が五百匁餘り、錢も有りは有りながら、夫の留守に一錢でも貸す事はいかな／＼」とはねつけた。お吉としては今まで毎度の事だから斷るのほもつともだが、上銀の有高と入れ場所を告げた事は、彼の野望を甚だしく又急にそゝつたにちがいない。彼は絶體絶命を打ち明け、親父の謀判して上銀二百匁の借銀を今夜中に返さねばならぬ事を告白した。そして、自害して死なうと覺悟し、「これこの脇差はさしはきいて出たれども」といつて、短刀を懷に吞んできた事を前もつて示している。こういう點から考えても、初めはおどすつもりだつたと思われる。初めから殺すつもりならば、短刀は秘密にしておいて、お吉の不意に乗じて殺すはずである。自害して死のうというのは口實で、この男は自害するようなそんな殊勝な男ではない。さてお吉は例の手よと思つて、きつぱりと斷つた。「ハア何とせう借りますまいと、いふより心の一分別」とある。こゝに與兵衛の殺意は決したのである。そこで、持つてきた空樽に油二升貸してくれといつた。これは手段であつて、お吉が賣場で油を量るうしろから突き刺すためである。これが心の一分別である。お吉は油に映る刃の光を見てびつくり、今のは何ぞといへば、いや何でもござらぬと、脇差をうしろに押し隠した。彼は元來常習の殺人鬼ではなく、生まれて初めて人を殺す全くの白人である。その態度がよく出ている。お吉が戸外へ逃げようとして、出合えと叫ぶ一瞬、刃はお吉の咽喉を突き刺したのである。與兵衛の詞に、「こなたの娘がかはい程、おれもおれをかはいがる親父がいとしい、金拂うて男立てねばならぬ云々」とあるが、親父をいとしいと思うというのは例の間に合せの詞で、相手に殊勝な心と感じさせようとする口實に過ぎない。結局、彼は短刀でおどして無理に金を借ろうしたが、お吉は頑として應じないで、かつ輕卒にも上銀の高と有り場所までも口ばしつた。與兵衛の野心はむら／＼とそゝられて、ついに殺意を生じたのだと思う。

この殺人の直接の原因は今述べた通りであるが、これの背景をなす原因は二つある。一つは、與兵衛はすでに家を追い出されて、行く所がない。金があれば遊里に行つて泊まるが、五月四日は節供の前日で、商家も遊里も金錢の請拂日である。遊里に行くにしても彼は借銀だらけで、一寸のがれに延ばしている。どうしても金が欲しのである。今一つは、小兵衛への借銀である。豊島屋の門口で「小兵衛こりや念入るゝな、河内屋與兵衛男じや／＼當てがある、庭島の鳴く迄には持つていく、眠たくと待つてもらを」と大きな口をたゝいている。この借銀は四日期限で、あす五日の節供になれば銀一貫目返す證文で、しか

も親父の謀判である。今夜が延びては町へ訴えられる。訴えられれば、親父の困惑はともかくとして、彼は首綱であり、小兵衛に約束した面子も立たない。武士は勿論面子を重んじたが、町人も同様である。紙屋治兵衛の小春身請金の調達も、龜屋忠兵衛の封印切りも、全く町人の面子からである。大局から見れば、これらの面子はつまらぬ事のようにあるが、當時の町人に取つては大切な事であつた。與兵衛の場合も、これにつけ、かれにつけ、とにかく人を殺しても金が欲しかつたのである。

與兵衛が捕えられた時、「一夜過ぐれば親の難儀、不孝のところが勿體なしと思ふばかりに眼つき、人を殺せば人の歎き、人の難儀といふ事にふつと眼つかざりし」と殊勝らしい事をいつているが、これは近松の例の筆法で、與兵衛の如き親を足げにする程の者が、親の難儀や不孝を思つて人殺しをしたとは思われない。彼は金を奪つて、小兵衛に返すどころか、直ちに遊里に向つてゐる。作者は、罪を犯した者にも純美な性情のある事を他の作品にもしばしば描破しているが、右の親の難儀云々は與兵衛には當てはまらぬ。彼は又最後に「仇も敵も一つ悲願南無あみだ佛」といつているが、これも例の筆法で、觀客の心には一抹の安心感とか、ゆとりとかを與えるけれども、そこが又作者のねらいでもあるが、たとい與兵衛にこういう殊勝な心が起つたとしても、それはほんの一時的で、もしも彼が萬一解放されたとしたなら、やがて再び以前の放蕩無慙のわがま者となる事は必然であらう。

次にお吉の性格について吟味してみる。すでに上巻得庵堤の茶店で、與兵衛に對し、「本天満町河内屋徳兵衛という油屋の二番息子、茶屋のわけ（遊興費）もろくに立てず、あのざま見よと指差しするが笑止な、こうとうな（實直な）兄御（太兵衛）を手本にして、あきんどといふ者は一文錢もあだにせず、雀の巢もくふにたまる。随分かせいで親達の肩助けと、心願立てさんせ」と忠告して、そのきまじめな一面を示している。又、與兵衛がけんかして泥まみれになつた時、洗いすゝいでやつて、夫に疑われた位である。中巻には出ないが、お吉は下巻には登場している。徳兵衛お澤の夫婦は、お吉のまじめさを頼りにして、從來も與兵衛への意見を頼んでいたが、五月四日の晩にも兩親は錢と粽を差出して、しみじみと與兵衛の事を頼んでいる。與兵衛も從來しばしば金に困つてお吉には無心しているので、彼がいよいよ新銀二百めの借銀を云い出した時、お吉は一旦その立場に同情したが、これも又その手よ、と思ひ返して、きつぱりとはねつけた。お吉は徹頭徹尾世話女房で、主人に貞實、家業に精勵し、三人の子の養育につとめ、又、與兵衛のような不良に對しても、姉さん氣取で訓戒と激勵につとめたのであつた。さて咽元を突き刺された時、「今死んでは、年はいかぬ三人の子が流浪する、それがかしい、死にともない、

金も入る程持つてござれ、助けて下され與兵衛様」と叫ぶ斷末魔の詞には、女性としての本心が遺憾なく發露している。お吉は與兵衛に對して終始好意をもつて善導しようとしたし、又まじめであつたため、彼女が殘酷に殺された事は觀客の同情を一身に集めずにはおかないのである。

次に徳兵衛について一言しよう。彼はもと忠實な手代で、そこを見込まれて、山本森右衛門（お沢の兄）の切なる願いでお沢と夫婦になつたが、義子與兵衛に對しては常に遠慮がちで、與兵衛の兄太兵衛が徳兵衛に對して、「地體親ぢ様が手ぬるい、私と與兵衛めはお前の種でないとてあまり御遠慮が過ぎます、腹に宿つた母じや人と連れ添ふお前、眞實の父と存ずる、やがて鐐を取る程昔丈のびたおかちは打叩きなされても、あんだらめ（與兵衛）には拳一つ當てずほたえさせ、萬事に遠慮が皆身の仇」と注意する程である。徳兵衛は又、「故主人の」年忌命日も弔ひ、地獄へ落さず迷はせまいために名跡について苦勞する」といつて惱んでいる。與兵衛にさん／＼踏まれた時にも、「この徳兵衛は親ながら主筋と思ひ、手向ひせず存分に踏まれた、腹を借つた生みの母に今のざま、脇から見る目も勿體なうて身が慄ふ、今打つたも徳兵衛は打たぬ、先徳兵衛殿冥途より手を出してお打ちなさるゝと知らぬかやい」といつて、故主人を一ずりに思っている。與兵衛が母に杓（すく）の先でこすり出されてすこすこと去る時、その後姿を眺めて、徳兵衛はわつと叫び聲をあげ、「あいつが顔つきせい格好、成人するに従ひ、死なれた旦那に生寫し、あれあの辻に立つたるなりを見るにつけ、與兵衛めは追出さず、旦那を追出す心がして、勿體ない、悲しいわいの」と泣いて、どんと伏すのであつた。主人思ひの手代氣質が遺憾なく吐露されている。こういう態度が與兵衛をますます増長させたわけではあるが、それだからといつて、われ／＼は徳兵衛の氣持を責める氣にもなれない。近世の主徒觀念が生んだ一つの典型である。

構想 上巻は序幕ともいふべきものであるが、野崎參りの途中、得庵堤を場面としてゐる。主役の與兵衛と脇役のお吉とが既に登場してゐて、與兵衛の遊蕩性と不良性との一面が出、お吉のまじめな性格の一端が描かれ、觀客に一應の予備知識を與えている。與兵衛の叔父である武士森右衛門が登場して、與兵衛を斬り捨てようとする所を、幸いに許してやつたが、中巻では登場しないけれども、與兵衛が叔父の恩を裏切つて叔父の名を利用して親から金子を詐取しようとするうそが暴露する。上巻の森右衛門の登場はこれからの伏線たるの感じがなくてもない。森右衛門は、更に下巻、與兵衛の捕縛された時に姿を現わし、甥に對して懇々と訓戒し、又愁歎をもらし、犯罪が露見せぬ先に遠國へでも落してやろうと苦心した事を語り、甥を思う慈愛

が描かれている。全曲を通じて森右衛門の役柄は相當に効果的に配置されていて、中途から影を消した尻切れとんぼに終つていない。武士としての精神も上巻に既に描かれていて、ぬかりがない。すなわち與兵衛を捕えた時、「甥と見たればなお助けられぬ」といつて斬り捨てようとする如きである。中巻は、河内屋の場面で、與兵衛の不良殘忍な行爲によつて養父徳兵衛と實母お沢との慈愛が光り、同時は家庭の内情がこまかに寫されている。上巻を下巻に直ちにつないでも、大きな破綻は起らぬようにも一應は思われるけれども、そうではなく、中巻あるがために與兵衛の主役たる重要さがあります。深く感じられ、全曲に重みを加えている。下巻はいよいよクライマックスに達するが、中巻はこの頂點に至る登り坂であつて、上巻の麓から一足飛びに絶頂へは登れないのである。又中巻の場がないとすれば、與兵衛の放蕩不良は、何がそうさせたかという理由が稀薄となり、主役たる裏づけもなくなるので、中巻は是非ともなくてはならぬ有効な場面である。下巻は、與兵衛に對して日頃好意を寄せていたお吉を與兵衛が殺すという殘酷な場であるが、徳兵衛の錢三百文と、つゞいて登場するお沢の錢五百文と綜とをお吉に托する所は、不良であればあるほど子をかわけく思う親の海より深い慈愛がしみみと出ていて、覺えず觀客に袖を絞らしめるのである。くぐり戸の外にたゞずんで立ち聞きする與兵衛も、自ら後にいう通り、「二人の親の詞が心根にしみこんで悲しいもの」であつたかも知れない。しかし心根にしみこんでという詞は、詞の上の哀願の手段ではあるが、少なくとも彼も人の子である以上、胸底の一隅には一時的にもせよこたえたであらう。だが、胸の底までしみ込んだとは思われない。

さてこの場面の描寫について味わつてみるに、與兵衛が殺意を生じてじり／＼と詰め寄る言語動作や、お吉のそれは、極めて自然で、かつ眞實に迫つてゐる。又お吉が油にまみれ血にまみれながら三人の子を思つて叫ぶ場面は、おのずから目をおおわしめる。この慘劇は、作者も觀客に不吉な豫感を與えるため、例によつて、例えばお吉が「爪櫛の齒の、はあ悲し、一枚折れた」といい、七左が立ちながら酒飲むのをとがめて、「いま／＼しい、立酒飲んで誰れを野送り」と書いてゐる。これらは近松の他の曲にもしばしば見る常用手段であつて、一長一短であるが、當時の觀衆の教養程度としては効果的であつたかと思う。全曲を大觀すれば、不良惡逆は、これに對するに慈悲愛憐をもつてすれば、その不良惡逆はますます／＼さへ、惡逆に對するに愛憐をもつてすれば愛憐はいよ／＼光ってくる。白に對するに黒をもつてすれば白はますます／＼白く見える。この理論は作者が常に抱懷してゐたものであつて、それと同時に、いかなる惡人にも善美な感情はあるものと考え、その人性の美と眞とを描破しようとしてゐる。與兵衛にも、最後に善心のひらめきを見せようとしたが、この作ではむしろ効果的ではなかつた。與兵衛